

3. 輪島市門前町の総合地域調査

—能登半島地震からの復興に果たした地区組織の役割を中心に

(代表) 國廣 愛佳 (文学部人間学科 文化人類学コース 3年)
伊藤 葵 河原 侑介 木村 伶美 榊 亜里沙 新保 悠
種五 加奈 田村 賢 早川 聖哉 福田 あい
(文学部人間学科 文化人類学コース 3年)

指導教員

鏡味 治也 (文学部人間学科 教授)
西本 陽一 (文学部人間学科 准教授)

1. 背景と研究目的

当研究室では、フィールドワークと呼ばれる、聞き取りを主とした調査を中心に研究している。フィールドワークは自らにとって未知の集落へ行き、そこでの習慣や行事を学ぶことで異文化を体感し、自分の持つ既知の文化を相対化することを目的とする。

学部生は3年次に石川県内のある地域を対象としたフィールドワークを行う。このフィールドワークを通して、学部生はその手法と目的を学ぶ。

2. 概要

3年次の春季学期に対象地域を選択、その地域について郷土資料や各種センサスを利用して文献調査を行う。そして、夏季休暇期間中に対象となる地域に1週間調査のために滞在する。本年度は輪島市門前町の道下・黒島地区を調査対象地域に選定し、7月29日から8月5日までの8日間を地域に泊り込み、フィールドワークを行った。

聞き取り調査は主な手法としては、あらかじめ連絡を取った住民の方々のお宅に伺い、聞き取りを通して地域に関する全体的な事柄を学ぶ。また、そのほかにも道すがらの住民との雑談によって情報を得たり、祭りの準備等の参与観察を行ったりすることもある。聞き取り調査では、文献からは分らなかった、もしくは示されていない情報が得たり、それに記されている事柄とは異なる情報を得ることが出来る。

秋季学期に学部生は各々調査テーマを設定し、各自で補充調査を行いながらデータを補充し、中間報告会で理論を改善しながらテーマについてまとめ上げる。まとめ上げられた内容は、平成

21年3月31日付けで調査報告書として刊行され、大学図書館などと共に、地域の世帯にも配布され、成果の社会的還元が試みられる。

今回調査地に選んだ道下・黒島の両地区は、平成19年3月25日に最大震度6強を記録した能登半島地震で特に被害の激しかった地域である。この地域での迅速な復興が可能になった背景には、震災前から培われていた地区組織の活動や、住民同士の繋がりがあると考えられた。そこで今回の調査では、能登半島地震からの復興、また、その影響を念頭に、道下・黒島地区の住民組織や生業、冠婚葬祭といった様々な角度から聞き取りを行った。そのことにより、祭事やまちづくり、地区組織といった文化と活動が、時代を超えて住民同士の強い繋がりを支え、震災という場面でも力を発揮する姿がみえてきた。

3. 調査内容

調査報告書の各章をなす調査テーマは、「道下の農業」、「家のづくり」、「『船員』のまち 黒島と住民」、「能登黒島天領太鼓」、「道下地区における夏祭の継承」、「寺院と行事」、「天領祭と黒島地区のつながり」、「黒島・道下の結婚儀礼」、「黒島・道下地区の葬儀」、「能登半島自身の経験と地域」である。ここでは、「『船員』のまち 黒島と住民」について取り上げて説明していく。

3-1. 黒島と廻船業

今回の調査地とした石川県輪島市旧門前町の黒島地区は、能登半島の沿岸に位置し、江戸時代には北前船の寄港地として栄えた廻船業のまちである。北前船が他交通機関の発達によって衰退した後も、船員である男性が春から秋にかけて2、3航海し、冬に妻子の待つふるさとに帰り、妻や家族がそれを待つという黒島の生活形態は変わらなかった。日本全体から見ても、黒島のように300年以上にわたって、まち全体が廻船業に関わっていたところは非常に少ない。黒島の住民の生活は常に、廻船業とともにあるのである。この報告書では、黒島の住民の生活の中心となってきた「船員」を、廻船員、および商船会社の社員として航海をした船員の両方を含むものと定義し、その存在が人々の生活や慣習、人生にもたらしてきた影響をみていく。

3-2. 太平洋戦争と黒島の船員

廻船業と黒島の住民の関係性を表す具体的な例として、まず、黒島で生まれ育った方の戦争体験をあげる。「船員である」ということは、戦争に際しても黒島の住民に大きな影響を与えることとなった。昭和26年に始まった太平洋戦争で戦死された97名¹のうち、陸海軍の軍人として殉死したのは27名、戦地へ兵士や物資を届ける御用船の乗組員としては70名と、船員として戦死された方が全体の7割を超えるのである。さらに、太平洋戦争での戦死者数と死亡率を比較すると、軍人は海軍47万3800人で死亡率は16%、陸軍は167万7200人で死亡率23%である。これに対し船員の戦死者数を見ると約6万人で、死亡率は43%に上る。単純な比較は出来ないが、少なくともこれらの数値は、一見最も危険にさらされていると思える軍人として戦地に赴いた人よりも、御用船軍属の船員として戦争に参加した人の死亡率の方が2倍以上高いことを示しており、船員

を多く抱える黒島への戦争による打撃は、軍人を多く輩出した地区と同じく、非常に大きかったことがうかがえる。

今回の調査では、船員として太平洋戦争を経験された黒島の M 氏（80 歳代、男性）にお話をうかがう事が出来た。M 氏は太平洋戦争開戦の半年前、乗船勤務中に大阪で徴兵検査を受ける。翌年、歩兵第 107 戦隊に入営を果たすと、その 1 週間後には満州へと派遣される。2 ヶ月間初年兵教育を受け、第九師団歩兵第七戦隊十一中隊の一員となられる。3 月にはトラック諸島月曜島に上陸し、向かいの島と連絡を取り合い、本部からの指令を伝える役割を担っていた。7 月にはサイパン島が玉砕され、10 月以降の内地からの補給が途絶える。現地での自活が至上命令とされた。そして昭和 20 年 8 月 15 日、芙蓉島で敵の上陸に備えて防護陣地を構築していたところ、M 氏は終戦の知らせを受けた。

M 氏は、開戦後 2 年「もんとりおうる丸」に乗船中の弟と、御用船タンカー機関長をされていた父親を、いずれも米軍の爆撃で失われている。「どこかで捕虜になっていて、いつか再会できるのではないか」と思っていたそうである。M 氏は、当時寸での差で沈没を免れたことなどを振り返り、戦争は「運」によるところが多いと言い、「軍隊は運隊だ」という上官の言葉を思い起こされた。航海中に島が見えると、「あの島にあげてくれないだろうか」とさえ思ったそうである。御用船の役割は戦地へ兵士や必要な物資を運ぶことであり、実際に戦場に立たないまでも、重要な貨物を乗せているため、当然激しい襲撃を受ける。敵の砲弾の音を聞きながら、武器を持つでもなく船で耐え、死に直面しても戦いながらさえ死ねず、静かに船と運命を共にするしかなかった船員たちの苦しみははかり知れないものである。

御用船員として戦争に参加した人の多くは、終戦後も船員として世界各国を航海し続けた。当時のフィリピンなど、治安の悪い地域では上陸できないこともしばしばあった。タイや東南アジアの国では、現地で働く人々から「日本のおかげで独立できたⁱⁱ」という声を受け、複雑な心情を抱いたそうである。終戦直後にも関わらず、時には対戦相手の国とまで接する仕事を行った船員は、当時の状況を思い浮かべても稀な職業であったと言えるだろう。

また、背景は違おうとも、夫が普段から命と隣り合わせの航海に出ている黒島の妻たちにとって、戦時中の夫の不在や、さらに言うならば夫が戦死してしまった不在は、他の地域の、他の職業の夫を持つ妻たちとは違った意味を持つのではないだろうか。地区全体で海員業に関わってきた黒島においては、その連帯感によって、戦時中の夫や父親、男性の不在への対応も、妻や家族だけのものではなく、黒島全体の問題となっていたと考えられるのである。

3-3. 黒島の住民組織

調査初日、はじめてうかがうお話の中で「カイインダン」という言葉を耳にしても、すぐにはどの漢字が正しいのか判断できず、あわてて片仮名で書きなぐったのを覚えている。「海員団」は黒島地区特有の、独立した組織なのである。黒島海員団の発足は太平洋戦争終戦の翌年、昭和 21 年 1 月のことである。黒島では江戸時代から船方祭りが行われており、当時から海員同士の集まり自体は存在していた。その集団に、昭和 21 年になって「海員団」という名称が付けられたのには、太平洋戦争で黒島の船員が多く戦死されたことと関係があると考えられる。

海員団の主な活動としてあげられるのが、北前船業の栄えた藩政時代から続く「船方祭り」である。

平成 21 年で 189 回目をむかえるこの祭りは、その名の通り船員たちの祭りで、別名金比羅大祭とも呼ばれ、黒島の船主と乗組員が一体となって海運繁栄と海上安全を祈願するものである。400 年以上にわたり受け継がれてきた船方祭りは、元旦に行われる「元旦祭」、6 日の「鎮火祭（焼け祭り）」に続いて行われる。毎年 1 月 9 日から 11 日の 3 日間に開催され、9 日の宵祭りでは、提灯を連ねて太鼓を打ち鳴らしながら黒島全域をねりまわる。10 日を本祭りとし、11 日には物故者の法要が行われる。黒島の住民にとって船方祭りは、船員たちが再び航海に出る春の訪れを意識させる行事でもあった。

さらに、黒島には船員にまつわる組織として、黒島海友婦人会がある。大正から昭和初期にかけては、常時 200 人前後の船員を送り出していた黒島の女性たち。その間には、「留守を堅固に守らねばならない」という怠惰を忌むしきたりがあった。嫁も姑も親も船員の妻であるという環境が作り上げたもので、お互いの生活を監視し合い、助け合う「運命共同体」の精神を自然と生み出したものである。その船員の妻による組織が、全国海友婦人会なのである。地区行事の運営に加え、能登半島地震の際にはメンバーによる炊き出しが行われた。

しかし、少子高齢化の進む現代、黒島もその例外ではない。現役船員の減少(平成 21 年現在 5 名)により、いずれの組織も OB 会員がそのほとんどとなっている。黒島の人々はその原因として、自分たちが船員として働いてきた分、子供にはしっかりと教育を受けさせたいと思う親が多いこと、黒島では農業で生計を立てることは難しく、近くに働く場所も少ないということあげる。また、船員は常に危険を伴う過酷な労働ゆえ、高給な仕事のひとつでもあった。船員たちは家を留守にすることが多い代わりに、その高給を子供の教育に回すことが出来たのである。皮肉にも、船員としての利点が、他の地区と比べて若者の少ない現状を生み出す直接的な要因となっているとも言える。

けれども、そのような厳しい状況にありながら、海員団や黒島海友婦人会は、現在でも存在が維持されている。そのことについて、お話を伺った団員や OB の方は全員、黒島の北前船からの船員業の長い歴史によるところが大きいという見方をされた。北前船の存在は歴史や産業だけでなく、今日の住民の意識にもしっかりと根付いたものようである。

3-4. 黒島の絆と将来 一考察にかえて

黒島は昭和 29 年、門前町、諸岡村などとの合併を経験している。合併した地区の名称を見てみると、他の地区が「門前町道下」「門前町鹿磯」となっているのに対し、黒島は「門前町黒島町（まち）」と、住所に「町」を残した形で合併している。黒島の方々にお話を伺う中で、黒島は「一字一村」のまちであるという言葉が度々耳にした。その考えがあったからこそ住民同士の繋がりも濃く、黒島で 1 つの地区であるという意識が強いため、合併に際しても「町」を残すという結果に至ったのであろう。

黒島の船員や住民をめぐる状況は、近年の社会環境によって大きな影響を受けている。過疎化や高齢化は、現役船員数だけではなく、長い歴史を誇る「天領祭」(右写真)や「船方祭り」にも影を落としているようにも見える。必然的に参加者は減り、黒島の子供たちは姿を消しかけている。「昔のような活気がなくなってしまった」という声を、



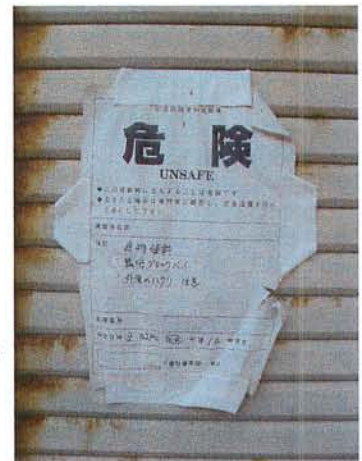
住民の方に話を伺う度に耳にした。確かに、祭礼や地区行事を文化としてとらえようとする、長い昔から幾分も変化せず、守り続けられているものが最も重要であるように感じがちである。特別な祭事や習慣を残していくことは重要なことではあるが、しかしながら、大切なのは、その文化が住民の中で果たす役割や位置を失わせないことではないだろうか。天領や海員団、「船員」の存在は黒島の住民にとって、現在でも、他の地区と自分たちを区別するアイデンティティーとなっていると言える。どのように状況が変化しようとも、天領の面影や「船員」の存在は、組織や祭事によって保たれ、守ろうと努力され続けている。その点にこそ、今後の黒島を形作る力と希望があると考える。

以上をまとめ、この調査で得られた結論は以下のことである。

- ・ 黒島では北前船での繁栄から続く廻船業、あるいは船員としての海員業が生活の要となり、祭礼や住民組織など文化的な面でも住民を支え、黒島を形作るものとなった。
- ・ 船員を多く抱えた黒島は、それゆえ他の地区とは異なった環境にあり、戦争においても多数の犠牲者を生んだ。
- ・ 船員を中心とした黒島の生活は、住民同士の強い繋がりを築き上げ、能登半島地震などの不測の事態にも対応しうる組織となった。

3-5. おわりに

調査に伺った初日、黒島を歩いていて驚いたことがある。ふと目をやった民家の外壁に、2年半前の地震時に張られた「応急危険度判定結果」の紙がそのまま残っていたのである（右写真）。「危険」、「要注意」といったものが見受けられ、専門家に相談し、応急措置をしてから建物に入るように指示されている。一見するとなんの変哲もない穏やかな海辺のまち。しかし、立ち並ぶ新しい家や草の生い茂る空き地、かすかな違和感は、確かに地震の爪あとを物語っている。実際に現地足を運び、住民の方からお話を伺うことで、改めて地震の恐さとその影響を実感した。



また、何度も丁寧にお話いただいた黒島・道下の方々に、この場を借りて深く御礼を申し上げたい。突然の訪問、初対面の私たちにも優しいもてなしをしていただき、快くお話を頂いた。両地区の方々あってこそ、つたない文章ながら報告書を執筆することができ、また、学問以外でもとても心に残る経験をすることができた。本当にありがとうございました。

- i ここであげる人数および数値は、黒島の住民からの聞き取り調査、日本殉職船員顕彰会ホームページに基づくものである。
- ii 太平洋戦争において日本と同じ戦闘国であった。イギリスの最新鋭の戦艦を日本軍が沈没させるなど、日本の行動は同じアジアの国々にある種の希望をもたらしたと見る人も多い。同盟国であったタイのククリット元首相は「日本のおかげでアジア諸国はすべて独立した」とも発言している。